

KAN: History, Environment, Civilization
a quarterly journal on learning and the arts for global readership

藤原書店

環

学芸総合誌・季刊

【歴史・環境・文明】

【特集】

日・中・米関係を問い直す

アメリカとは何かⅢ

vol. 52 / 2013 Winter

「中国白書を読め」の一言

〔米中間に横たわる「現実主義」の実績〕

松尾文夫

日本部にはいなかったエリート集団

私は中国問題の専門家ではなく、北京や上海の特派員経験もない。もちろん中国語は話せず、読み書きもできない。

にもかかわらず、私は今、黒船来航で始まった日米関係よりも六九年も前に貿易で始まったアメリカと中国——をテーマとする次の著作に挑戦している。二〇〇四年以来、中国側でのリサーチ旅行を続け、九回を数える。中国の友人も増え、二〇一二年四月

には、清華大学日本研究センターで二〇〇五年以来、提唱している日本とアメリカ、そして中国、朝鮮といった隣国との歴史和解をテーマとする講演も行った。事実上、次の一冊は、ライフワークの総仕上げといったものになりつつある。

本稿では、そのきっかけとなったエピソードを報告しておきたい。それは、一九四九年十月に毛沢東の元で発足した新中国に対するアメリカの「現実主義路線」という、現在のアメリカと中国の関係にも通用する「素顔」との出会いの記録でもある。

話は四六年前にさかのぼる。共同通信記者として最初のワシン

トン特派員生活を送っていた一九六七年のある日、私はいつものように國務省の定例記者会見取材したあと、思い立って当時はアジア共産主義部と呼ばれていた中国担当のオフィスを初めて訪ねた。一九六五年の二月にジョンソン大統領が北ベトナム爆撃、そして海兵隊ナン上陸というケネディ政権時代から始まっていたベトナム軍事介入のいわゆるエスカレーション政策に踏み切り、最終的には五〇万人を超えることになる米軍を送り込み続けていた時期で、中国は、北ベトナムの背後にいて東南アジア全体の共産化をもくろむ仮想敵として位置づけられていた頃である。

当時の共同通信ワシントン支局はわずか三人。支局長と経済担当の先輩の下で、私が日米関係を含むアメリカ内外政治を担当、ホワイトハウス、國務省、そして沖縄施政権返還交渉が日米間の最大の懸案であった時代のニューズソースとして、上下両院の取材にまで足を伸ばしていた頃で、國務省では、記者会見の他は日本部を時たま訪れるぐらいで、中国担当部まではなかなか時間が割けないのが実態だった。

しかし、連日のように北京とホワイトハウスとの間で飛び交う非難合戦を見るにつけ、そして米中戦争の可能性がアメリカ内外で声高に論じられるにも接して、ワシントンで仮想敵国中国の担当官達が何を考えているのか捉えておくことも必要だと思いうようになった。行ってみると、オフィスのスペースが日本部の五倍ぐらい大きく、働くスタッフの数も多い。これは「仮想敵」であ

中国放棄の「懺悔の記録」

「中国白書」とは俗称で、正式には一九四九年八月に國務省から「アメリカと中国の関係——一九四四年から一九四九年の時期に特化して」と題して出版され、当時のデイーン・アチソン國務長官の署名があるトルーマン大統領宛の伝達書が冒頭にある公式な報告書である。十九世紀以来の「門戸開放」政策による欧州列強や日本とは異なる米中友好関係の実績を自賛した後で、日米開戦前からのシェンノート義勇空軍の参戦、一九四四年のスチルエル將軍の軍事顧問としての派遣とその挫折、ハーレー大使の延安訪問、そしてマーシャル大統領特使の投入による国共和解、「連合政権」樹立などの数々の仲介交渉がすべて破綻し、一九四九年の毛沢東の内戦勝利、政権樹立、蒋介石政府の台湾脱出を迎える五年間の米中関係の詳細な分析が膨大な資料と共に、一〇七九ページにわたって収められていた。一言でいえば、一九四四年から本格化したアメリカの蒋介石政権でこ入れ政策失敗の軌跡を生々しく記録した、アメリカ側からのいわば「懺悔の記録」と言ってもいい異色の文書である。

私が驚いたのは、現実主義路線が次の二点で赤裸々に語られていたことだった。

一つは、「国民政府の失敗はアメリカの援助が不十分であった

る以上仕方がないかと思つた。しかし、担当官達のほとんどがハーバード、エール、プリンストンといった名門大学出身者で、中国語をマスターしていたのには驚いた。日本部の友人のおぼつかない日本語とついつい比べて、考え込んだのを覚えている。

そこで出会ったのが、リチャード・ハンプステッド・ドナルドという私より十歳年上の担当官で、当時アジア共産主義副部長の肩書を持っていた。両親がいた南アフリカの生まれ。エール大学卒で一九四六年に國務省に入り、中米、日本などに勤務の後、五年から中国専門家としての教育を受けた人で、ぶっつけ本番の取材にも親切で、初歩的な質問にも嫌な顔一つ見せず答えてくれた。アーリントンの小さなアパートの我が家にも夫妻で来てくれ、昨夏七十五歳で亡くなってしまった家内の手料理を楽しんでくれた。

その温和な彼からある日、いつになく強い口調で「とにかく一九四九年に出た中国白書をよく読んでみるよ」とのアドバイスを受けた。今振り返ると、この一言がその後の私の米中関係へのこだわりの出発点となったと思う。早速本屋の棚に並んでいた分厚い上下二巻の「中国白書」を買い、読んだときのショックは今も忘れもない。

ためではない。「国府軍は負けたのではなく、自ら崩潰したのである」とはつきり「手を引く」理由を述べるドライさであった。もう一つは、発表の時期の残酷さである。蒋介石がこの年の一月に引退表明に追い込まれた直後、首都北京が共産軍に占領され、政府機能は広東に移転を強いられ、さらにこの八月の「中国白書」公表後も重慶から成都と遷都を続け、十二月には台湾への脱出にせざるに活路を見出す国民党政権敗北の時期に、あえてアメリカが引導を渡すかたちとなったからである。共産党軍が北京を占領する三週間前、国民政府はアメリカ、イギリス、フランス、ソ連の四大国に内戦終結のための調停を依頼している。しかしアメリカ政府は即座にこれを拒否している。

つまり、このアメリカが六四年前、蒋介石政権に見せたこのダブルの現実主義は、事実上「毛沢東の中国」をアメリカが受け入れ、承認する可能性を示唆するものだった。これはアメリカの対中国外交の一つの顔として残り続け、今も決して消えてはいないことを忘れてはならない。

以下、アチソン國務長官が「中国白書」の冒頭に署名入りで書いたトルーマン大統領に対する伝達文のハイライトを要約しておく。歴史的な証拠文書として今も貴重な文献だからである。

●中国国民政府の失敗は米国の援助が不十分であったためではない。一九四八年の決定的な年を通じて、国府軍が武器や弾薬の不足によって戦闘に負けたことは一度もない。アメリカ軍の観

察者達が重慶で、戦争の初期から指摘していたように、腐敗が国府軍の抵抗力を致命的に弱くしていたという事実があるだけである。国民政府指導者達は、彼らに直面する危機に対抗する力がないことを立証し、彼らの軍隊は戦意を喪失し、一般市民の支持を失っていた。

●一方、共産党は無慈悲な規律と狂信的な熱情によって、自らを民衆の擁護者であり、解放者であるとして売り込もうと企てた。国府軍は負けたのではなく、自ら崩壊したのである。歴史が繰り返して証明しているように、自ら信頼を失った政権と、志気を失った軍隊は、戦闘の試練を堪え得ない。

●本報告が、これらの時期の中国共産党内の歴史と発達とを依怙頼りなく詳細に叙述するわけに行かない。その主な理由は、アメリカ政府が国民党政府と正規の外交関係を持ち、その領域内にいる代表者達から数多くの報告を得られるのに反して、我々と共産党との直接の接触は、主としてハーレイ將軍とマーシャル將軍が行った調停の努力にのみ限られていたからである。

●中国共産党の指導者が思想的にモスクワと連絡があることを十分に認めつつも、アメリカ政府としては、やはり中国における現在の勢力の拮抗関係に鑑み、国民党と共産党双方がお互いに譲り合って、中国政府が名実ともに全中国の政府となるように、またすべての党派が政府の立憲制度の内部で機能を発揮するようになることが望ましいとの見解をとった。一党支配の政府が

身も救われないのである。中国の近い将来が如何に悲劇的なものであろうとも、またこの偉大な国民の大部分が、外国の帝国主義の利益を守る一党派によっていかに冷酷に搾取せられようとも、最後には中国の深遠な文明と民主主義的な個性主義とが、必ず再び自らを主張し、外国の手かせ足かせを打ち破るだろう。中国におけるすべての発展は、今も将来も、この目標にむかって進むのだから、これを我々は激励すべきであると、私は考える。

●しかしながら、近い将来においては、中国に対する我々の友好政策は、目の前の展開に強く影響されざるを得ない。中国国民が、共産党政権は自分達の利益のためではなく、ソ連の利益のために働くのだということを、どこまで認識するか、そして中国国民がこの事実を目覚めた上で、こうした外国支配にどこまで対抗して行くかに影響を受けるだろう。

●しかし、我々の立場ははっきりしている。もし共産党政権がソ連帝国主義に身を任せ、そして中国の隣邦への攻撃を企てるならば、我々、および他の国連加盟国は、国連憲章の原則が蹂躪され、そして国際平和及び安全が脅威にさらされる事態に直面させられることになるだろう。

大きな反対党を武装蜂起の形でもっているような状態から速やかに脱し、非共産主義の中道的分子を包括するすべての党派が、本物の一つの国民的政権に参加するという形に発展して行くことを要請したのであった。

●これらの条件は一つも実現されなかった。国民党と共産党との双方の指導者相互間の不信が余りに深く根ざしていたからである。一時的な停戦と一見有望な交渉とが進められたにもかかわらず、最終的な協定はできなかった。そのみならず、国民党は一九四六年に、無益な軍事行動は中国を経済上の混沌に投げ込み、結局、国民党を破壊させるとのマーシャル將軍の警告を無視して、超野心的な作戦に乗り出した。

●結果はマーシャル將軍の指摘通り、国府軍は一時的には、共産党掌握下の都市を乗っ取ることはできても、共産軍を粉砕することはできなかった。こうして国府軍が前進するたびに、その襲撃の通信が共産党のゲリラによって暴露せられ、そしてその軍隊は米軍によって整備せられた武装のまま退却したり、降伏したりすることになったのである。

●避けようがなかった不幸な事実とは、中国における内戦の忌まわしい結果が米政府のコントロールの範囲を超えていたことである。そして今や明白なのは、我々が今実際に起こっている事態に直面しなければならぬということである。我々が希望的な考え方で我々の政策をみていたところで、中国人も、我々自

「アチソン・ライン」を吹き飛ばした朝鮮戦争

とにかくあげすけな中国放棄の路線であった。そしてこのトルーマン・アチソンのコンビは、翌一九五〇年一月、いわゆる「アチソン・ライン」構想を明らかにして、これに追い打ちをかける。アチソン國務長官は一九五〇年一月十二日、ワシントンのナショナル・プレス・クラブで「一九五〇年におけるアメリカの基本的立場」と題した演説を行い、「アジアには諸国民が一本立ちする新しいナショナルリズムの時代が訪れている。西が東を支配する古い関係は過去のものとなった。極東地域における東西関係は、相互の敬意と助け合いの時代を迎えている。我々は彼らの友人であり、彼らを助ける用意がある。しかし、我々は我々が求められ

援助の条件が実際に存在し、援助可能な国だけを助ける。この新時代のこれからの決定するのはアジアの国々であり、その国民自らの力である」と述べ、現状承認と不介入の方針を明らかにした。そしてアメリカ軍力の展開ラインをアメリカ大陸本土からアリゾナ・サン・フアン・沖繩・フィリピン・グアムを結ぶライン、その後「アチソン・ライン」と呼ばれることになるラインに収縮

再編成、すなわち台湾、韓国をあえて外し、その延長で韓国駐留のアメリカ軍の段階的撤収、米中国交正常化を視野に入れる構想を打ち出した。トルーマン大統領自らその一週間前の声明で、台

湾への中国の主権を確認し、アメリカの不干渉と事実上の中国承認を示唆していた。一九四九年後半から五〇年初頭にかけて、国務省が世界中の米在外公館に出した指令書には、「台湾は歴史的にも、法的にも中国領土である」と明記している。

この二人の発言のすべてを吹き飛ばしたのが、六カ月後の六月二十五日に火を噴いた朝鮮戦争であることは既に歴史の一部である。トルーマン大統領の自身が一番早かったかもしれない。その二日後の六月二十七日には、アメリカの参戦を表明、第七艦隊を台湾海峡に派遣、台湾に対するいかなる攻撃も許さないと立場を鮮明にした。現在まで続く「台湾問題」の始まりである。アジアにも東西対決の時代がやって来た訳である。

米中和解の下敷きとなる

「毛沢東の中国」は「ソ連の侵略による中国の赤化」と、台湾は「将来の地位は未決定であり、対日講和条約の締結を待たねばならない」といった具合にアチソン國務長官が口にしなかった言葉で語られるようになる。一九五三年からの共和党政権下でのダレス反共外交の時代のさきがけであった。国内的には、「中国喪失」の責任追及を含めて荒れ狂った「赤狩り」マッカーシズムを生み、國務省を中心とする多くの中国専門家がページされる悲劇を生んだ。もちろんアチソンは中国侵攻を求めたマッカー

シキなられた可能性もある。しかし、あきらめずにまだ行方を追っている。

アメリカは、その後インドシナ戦争での敗北を「名誉ある撤退」と内外にいいくめる舞台作りとして、ニクソン・キッシンジャーのコンビの元で「ニクソンと毛沢東との握手」を実現、歴史を変える。二三年前にトルーマン・アチソンのコンビが何処までもクールに守り通した「毛沢東の中国」への不干渉、つまり事実上の受け入れという現実主義路線の実績が下敷きとなっていたことは間違いない。

中国脅威論がかしましい折から、忘れてはいけないのは、日本への黒船よりも六九年も前にニューヨークから貿易船「中国皇后号」が広東に着いて始まったアメリカと中国との長い歴史の中に、こうした「日本にはない関係」が幾層にも沈澱しているという事実である。

サー元帥の罷免を決めたトルーマン大統領の決定を支持したこともあり、マッカーシズムの絶好の標的となり、「大統領を催眠術にかけた」とまでののしられた。

そして、重要なのは、この六月二十七日のトルーマン声明の結果、一九七二年のニクソン訪中まで続く中国を、「仮想敵」とする中国封じ込め政策が発動されるとともに、その延長線上でインドシナでのフランス軍の共産主義者との戦いに対する支援として、アメリカの軍事援助と軍事視察団が送り込まれたことである。こうしてアメリカは、一九七五年のサイゴン陥落まで約二〇年間続いたインドシナ戦争の悲劇に足を踏み込むことになる。

今思うのは、あのとき「ページ組」の苦難を間近にみた中国専門家の一人であるドナルド氏が一番いいかかったのは、当時彼が日々ワシントンで目撃していたジョンソン大統領のもとのインドシナ戦争エスカレーション政策が、中国内戦末期にはアメリカが自制していた直接軍事介入という「禁じ手」を解禁し、「出口」のない泥沼にはまり込んだことへの批判ではなかったのか——ということである。ドナルド氏とは、一九六九年の私の東京帰任とともに、連絡が切れ、八〇年代初めの二度目のワシントン勤務の時も再会出来ず、そのままになってしまった。三年前から真剣に探し始めたものの、台湾等での勤務を経て一九七二年にニューヨーク州にあるセントローレンス大学に「外交官研究員」として加わったところまでで消息が絶たれている。既に八十九歳であり、

彩流社

ブック・オブ・ソルト

2940円

モニク・トゥルン著／小林富久子訳

ベトナム生まれのアメリカ女性作家が描く、12カ国で翻訳の問題作。一九二〇、三〇年代、パリとベトナムをつなぐ大胆な構想。その重層的物語とは？

改革をめざすピュリタニたち

3675円

「ニューイングランドにおけるピュリタニズムと公的生活の変貌」
デイヴィッド・D・ホール著／大西直樹訳
参加 公平性、平等を意識した大胆な社会変革に、米国民主義の根源を探る。

アメリカ黒人町ハーモニーの物語

2625円

知られざる公民権の闘い

エウイングソン・ハドソン／コンスタンス・カーリ著 樋口映美訳
ミシシッピの黒人地域社会と権利獲得を語り継ぐ「公民権運動」の回想録。

増補版「アメージング・グレース」物語

2310円

「ゴスペルに秘められた元奴隷商人の自伝」
ジョン・ニュートン著／中澤幸夫編訳
アメリカの「第二の国歌」を生み出した人物の壮絶なドラマを編む！

〒102-0071 千代田区北見2-2-2 価格税込
TEL03-3234-5901 〒440 静岡は小社ウェブサイト
http://www.saiyusha.co.jp